

付金があてられ、清酒などの寄付もあった。

次に西灘村では、一九一三（大正二）年一〇月に同村教育会が開催、村の補助金と有志の寄付でまかなった。

地元本庄村では一九一五（大正四）年一〇月二〇日に村長深山廣三郎により開催され、七〇歳以上の七八名が出席した。

以上がこの地域での「尚齒会」の活動の一端である。ただ大正二、四年と開催が遅れた原因については、目下のところなぜか不明である。

前述したように各地域ごとの「尚齒会」がいつまで続いたのかははっきりしないが、おそらく太平洋戦争勃発など、戦時色が濃くなった頃に途絶えたのではない。いくら高齢者を大切にという気運があっても戦地へ働き盛りの若者を送り出したり、勉学に励む学生を学徒動員したりする中、祝い事どころではなかったのではないかと推測している。

さて、精道村については目下のところ記録を確認していない。精道村はそれまでの三条、津知、芦屋、打出四村が一八八九（明治二二）年に精道村となり、一九四〇（昭和一五）年に町制から芦屋市制へ移行した。

精道村においても前述した各村の設立から推測して、一九一一（明治四四）年から一九一五（大正四）年の間と考えてさしつかえはないであろう。その折設立記念品として参列者に配られたのであろう。明治四四年と言えば、打出焼初代坂口砂山が楠町の斎藤幾多のお庭窯を引き継いで春日町で開窯した直後の作品と思われる。

精道村から芦屋市へ至るまでの「尚齒会」についての記録はなく、当市において「尚齒会」について知る市民もすべて故人である。

戦後芦屋市における老人会の活躍を調べてみると、一九五五（昭和三〇）年代、市内在住の画家青木氏がサークル風の老人クラブを

結成し、一九五七（昭和三二）年に親王塚町の倉本氏が、一九五八

（昭和三三）年には大原町の天羽氏と福田貞治氏、一九六二（昭和三七）年には楠町の小林董次郎氏が各町で老人会を結成し、一九六三（昭和三八）年、老人福祉法の成立を前に、六月一三日、各町の老人会を「芦屋市老人クラブ連合会」とし、今日、市内には五十一クラブの老人による多種多様の活動がおこなわれている。

今回の小稿執筆にあたり、芦屋市教育委員会の学芸員四氏には快く了解をいただきました。また多くの関係者にお世話をおかけしました。本来ならご芳名を記するところ紙面の都合上、失礼ながら割愛させていただきました。

参考・引用文献

- 「文化財特集 考古学が解き明かす芦屋」『広報あしや』一〇〇一 二〇〇八年二月
藤川祐作「六甲山系の徳川大坂城採石場と積み出し地」『歴史と神戸』一六八 一九九一年一〇月
白谷朋世「打出焼」『のじぎく文化財だより』四一 一九九五年八月
亀山昌也メモ
吉川正通「明治末期『通俗教育調査委員会』制度の一考察―社会教育観と社会福祉観―」大阪府立大学社会福祉学部『社会問題研究』一九七九年一〇月、二九卷三号

神戸深江生活文化史料館が創立三〇年

神戸深江生活文化史料館は、一九八一年二月二十一日、神戸・深江生活文化史料室としてオープン、今年で満三〇年を迎えました。財産区管理会のご理解と地域の方々の支えでここまで到達しました。今後も地域と連携し、研究と普及活動が続けたいと思います。